

イザヤ書6章の「頑な預言」とその展開

油井 義昭

序

イザヤ書6章は預言者イザヤの召命の出来事と神から受けたメッセージを記した個所であるが、イザヤが神の預言のメッセージを伝えるユダの民は、伝えられる使信、神の預言の言葉を頑なに拒絶するのである。イザヤが預言者として置かれた状況はどのようなものであったか、又、イザヤが民に伝える預言はどのような意味を持ったか。イザヤ以前のモーセ五書において「頑な預言」の先駆的な預言があったか。イザヤの後のエレミヤ、エゼキエルが預言者としての召命を受けた時、どのような応答を民から受けたであろうか。最後にイザヤ書6章の「頑な預言」は新約聖書において、イエス・キリストとその使命において、又、初代教会において、どのように引用され、成就したかを見ることにしたい。

I イザヤ書6章におけるイザヤが見た主の幻とイザヤの召命

1 主の幻(1節—4節)

イスラエルの全歴史を通して、イザヤほどの偉大な人物も余り出なかった。預言者職へ召されたイザヤは、50年間、その悲劇と危機の時を通し国民を導いた。彼は上流階級に属していたが、その生涯の大半を通して宮廷の政策に反対し、最も鋭い言葉でそれを非難することとなった。¹

ウジヤはもともと極めて有能な人物で、近隣諸国を従え、内政的にも功績が多くあった。ウジヤ王が死んだ年は、紀元前740年で、アッシリアの恐るべき侵略的軍事力が、シリア・パレスチナ方面に南下を開始した直後のことであった。イザヤの召命はシリ

ヤ・エフライム戦争（前734-32年）勃発の六年前であった²。

イザヤは、その年にエルサレムの神殿において、「高くあげられた王座に座しておられる主を見た」（6・1）。「高くあげられた王座」とは、地上のすべての権力を超絶し、人間の罪惡を離れておられる聖なる栄光の主こそ永遠に変わらない王の王、君の君として崇め仕えるべき御方、ユダの民が、悔い改めて仕えるべき真の王であることを示している。「その衣のすそ」は、王である主の栄光を象徴したものである。イザヤは「神殿に満ちている」主の栄光を見た。

2節「セラフィムがその上に立っていた。かれらはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり」セラフィムは、サーラフ אֲרָפִיִּם（燃える）の派生語で、ケルビム（ケルブ）が神の御力と栄光を現わす天使であるように、神の聖さを現わす超自然的存在である天使である³。天使のうち最も高い地位を占めるセラフィム（セラフ達）は「燃え立つ者達」は上的一对を以て左右から顔を蔽い（神の栄光の強調）、下的一对を以て両足を覆う（裸足を隠す）。そして中的一对を以て飛び翔ける（その役務を果たす⁴）。

3節イザヤは神の顕現に接した。セラフィムが互いに呼び交わして「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ」と言うのを聞いた。「聖なる」を繰り返したのを「聖なる三唱」と言い、主の絶対的に聖なる神であることを強調する。聖（カドーシュ קָדוֹשׁ）の原意は分離又は隔たりである。聖が神に適用された時、第一に神と人との隔離を意味し、冒しがたく近付き難い神を表わし、この神に対してはただ恐怖、畏敬、崇拝をもって仕えるべきものとされた⁵。神は全能者である。三重の聖さは主の聖さがトータルで神の絶対的エッセンスであることを示す。聖は幾つかの理解の領域をカバーする。神は全被造物と全宇宙の上に絶対的に超越している。神は、罪のない方である。それで神は被造物である人類の中の罪を許容することが出来ない。しかもイザヤは全くその聖

なる神が、又、神の民の救い主であることを発見する。こうして神の聖さは一方では神と人類の間の距離を造る。他方神の聖さは神と人類の間の交わりの更新を創造する。⁶ 4節「その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた」のは、神顕現に伴う随伴現象であった(出19・18)。

5 イザヤの罪の赦しと聖めと預言者召命(5節—8節)

5節はイザヤの自己意識である。イザヤは神の前に自分の罪と汚れを感じて、恐れおののいたのである。「汚れた」は「聖別されていない」の意で、「汚れたくちびる」はイザヤの自らの罪の汚れを知ったということである。「汚れたくちびるの民」は主を畏れない言葉を発する民である。「の間に」(の中に)は聖なる主の前に、イザヤは民との罪の連帯を意識することを表わす。

6節7節はイザヤの罪の赦しと聖めである。イザヤの罪の自覚と告白は直ちに神に聞かれ、罪の聖めが与えられた。燃えるセラフが神の心そのものである祭壇から燃える炭をイザヤの唇に触れる。心の思いが出るイザヤの唇は、今や焼かれた。彼の不義や咎は取り去られ、彼の罪は覆われ、償われた。おののくイザヤの良心は完全な平安を得た。⁷

8節は召命である。今や罪の問題の解決した靈魂に向かって新たにまた声が聞こえる。今度は主ご自身の声である。「わたしはだれを遣わそう。誰がわれわれのために行くだろうか」

大きな使信が神にある。これを伝えるために遣わされるべき使者を神は求めなされる。イザヤの積極的反応は、神を信頼していたこと、彼の熱心を示している。今や神から委ねられた使命を達成するに相応しく、その民に使信を伝える準備が整えられた。⁸

イザヤはここで天上における神の会議における決定を知らされるが、これは、歴史的世界に対する神の支配と深い関わりがある。今や、古代近東世界全般にわたって、巨大な変動が起ころうとしている。それを神は常に前もって、預言者に告知するのであった。⁹

Ⅱ イザヤ書 6 章 9 節—13 節の釈義とイザヤ書における「頑な預言」の展開

1 イザヤ書 6 章 9 節—13 節の釈義と「頑な預言」

וַיֹּאמֶר לְךָ וְאָמַרְתָּ לְעַם הַזֶּה שְׁמַעוּ שְׁמַעוּ
וְאַל־תִּבְיֵנוּ וְרָאוּ רָאוּ וְאַל־תִּדְרְעוּ:
הַשְׁמֹן לִב־הָעַם הַזֶּה וְאָזְנוֹ הִכְבֵּד וְעֵינָיו
הִשְׁעָ פֶּן־יִרְאֶה כְּעֵינָיו וּבְאָזְנוֹ יִשְׁמַע וּלְכַבּוֹ יִבְנֶן וְשֵׁב וְרָפָא
לוֹ:

9 節「すると仰せられた。『行って、この民に言え。「聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』』

10 節「この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように。」

9 節の「この民に」は軽蔑と嫌悪の思いの響きがある。¹⁰ 「シメウーシャーモーア」⁹ שְׁמַעוּ שְׁמַעוּ と「レウー ラーオー」¹⁰ רָאוּ רָאוּ これは同族の定形動詞の後に不定形独立形が来る形であり、動作の継続を示す。否定詞アルの次の「タービーヌー」¹¹ תִּבְיֵנוּ と「テダーウー」¹² תִּדְרְעוּ は、未来形だけでなく、指示形で、ユダの民がイザヤのメッセージを受け理解することにおける失敗の実現を意味する。これ等の句は、強調法で、預言者が使信を民に伝える時の結果を表わす。

これは預言者が使信を語った後の通常の希望に反対のものであるが、これがその結果の正しい観察となる。主は預言者イザヤにこのような指示形（三人称に対する命令形）を使わせて、通常の希望の否定を予期することの備えをさせ、失望の苦しみを緩和する備えをさせたのである。¹² これはあたかも一つの目的のように、結果を表現するヘブル的語法である。「行ってわたしの使信を伝えよ。しかし彼らとその使信に注意を払うことを期待するな。あなたの説教の効果は民があなたの語ることを受け容れることの一貫した拒絶であろう。彼らがわたしの使信を受け入れ

ることを自分自身で不可能にするに至るだろう。¹³」

この9節の言葉は、その性格が箴言的（諺言的）でもあり、聖なる皮肉（マタイ 23・32）のように強く響く。ユダの民は預言者達を通して、神の御心を学ぶ機会を繰り返し持つが、民は心に留めないであろう。民の反応は心の頑なさと、心の盲目さである。預言者の言葉を聞くが、それを理解しない。罪のために心が頑固になっているので、見ても分からない。神の律法の啓示を聞いても、神のみが唯一の主であることを証明する神の業を見ても、その律法に従わず、神の主権、支配をも認めない。

10節の始めは「心を頑なにする命令」「心の硬化命令」として知られている。10節で神は命令の形で、イザヤの預言活動の結果を描く。不信仰の民は、預言が伝えられとしても、神のことを把握することが出来ない。10節の「心を肥え鈍らせ」（ハシュメーン ^{השומן}）は霊的、知的に鈍感にする、ということである。心（レーブ ^{לב}）は人間の内的本質であって、人間の意欲や行動は心から出て来る。心は理性、知性、知力を意味し、人間実存の全機能を司るところである。心は良心と訳すことも出来る。良心は神に対して「積極的に」背いたという自覚として覚醒させられる。¹⁴ 又、心は人の計画と欲望の中心である。¹⁵ 「肥え鈍らせ」は太らせる、つまり、神の働きかけに対して無感覚にさせるという意味である（詩 119・70）。「目を堅く閉ざせ」は、¹⁶ 眼病の目から滲み出る分泌物で目が閉じられるように目を閉ざすことである。民が神の啓示に無関心であることは神の元々の意図ではなかった。しかし、民に与えた沢山の啓示は、もし民がその啓示によって益を受けなければ、より大きな罪となったのである。その結果、民の霊的視覚、霊的聴覚、霊的感覚が取り去られる。¹⁷ 最後の「立ち返っていやされることのないように」は、非難するような調子である。これは啓示の通常の目的とは逆の結果を産むことを示す。通常は神の幻と言葉を見て、聞いて理解して悔い改め癒やされるのであるが、ここでは、神の幻を見て、神の言葉を聞くことが、民の歪曲

した悪の道の理解に導き、悔い改めて癒やされることがないという結果となる。¹⁸ここで民は「心を頑なにした」と言われた。主から民の頑なさは来る。心の硬化は一方通行で起こらない。民の心が「肥え太って重い」という表現は、主が民の心を重くしたという宣言と弁証法的関係の中で理解しなければならない。イザヤ書9章7節から21節は、イスラエルが主の審きの結果、神に敵対して堅固な陣を張ったことが明らかである。イザヤ書6章10節の心の硬化はユニークである。¹⁹

9節と10節は密接な構造上の繋がりがある。9節の「聞き続けよ。だが悟るな」と10節の「その耳を遠くし」は同義的連関がある。9節の「見続けよ。だが知るな」と10節の「その目を堅く閉ざせ」は同義的連関がある。また同時にそれは反対並行法である。そして、それぞれ後半句は、前半句が期待する結果ではなく、予想外の逆の結果となるので、漸降法的 (anticlimactic) と言える。

10節にはキアスムス (交差並行法) がある。A「この民の心を肥え鈍らせ」B「その耳を遠くし」C「その目を堅く閉ざせ」C'「自分の目で見ず」B'「自分の耳で聞かず」A'「自分の心で悟らず」というキアスムスになっている。

「立ち返っていやされることのないように」という最後の行は、対応関係がなく、却ってそのことを結論として強調する。つまり9節と10節は明らかに一つの思想のまとまりを持っており、全体としてイザヤの使命が民の心を頑なにし、悔い改めて癒やされることのないためのものとして、明確に表現している。

10節は極めて強い反語的な表現である。「悟るな」「知るな」「癒やされるな」と言うのは「悟れ」「知れ」「癒やされよ」という強烈な愛の激流が「悟らず」「知らず」「癒やされることのない」ところの頑なな岩に打ち当たって、跳ね返された奔流である。その中に神の限りない愛と、民の頑固で悟りのない心に関する正確な認識が含まれている。イザヤよ。行って民に救いの道を語れ。

しかし、この頑固な民は容易にあなたの言葉を聞かないであろう。彼らは打たれても、神に対する従順を学ばないであろう。²⁰

11節12節は民の心の硬化によって、全国民の審きは避けられない。12節は捕囚が示す。国の破滅が民の反逆の結果の故に避けられないと予告する。²¹

13節は、刑罰は、より良い将来のためであることを示す。13節は次の事が啓示する。「そこにはなお、十分の一が残るが、それもまた、焼き払われる。テレビンの木や榿の木が切り倒される時のように。しかし、その中に切り株がある。聖なるすえこそ、その切り株」エルサレムの状態は内外共に絶望的なものであった。ユダとイスラエルは「切り倒されたテレビンの木、榿の木」のようであった。「切り株」はユダの「残りの者」である。主の栄光と聖さの啓示の文脈において、イザヤは、聖なる残りの者を、主の栄えのある御国の設立のために備える使命を与えられた。残りの者は神の聖なる栄えある御国のために備える。イザヤは神の聖さによって、敬虔な民の新しい世界を見た。²²

2 イザヤ書における「頑な預言」の展開

イザヤ書4章3節4節に「残りの者は、聖と呼ばれるようになる。」とある。6章13節の切り株は森林火災を生き延びたもので、実際に神が来た時代に赦され新しくされた契約の民の聖い種である。イザヤは自分の人間的理解の把握を超える使信を宣言した。²³

イザヤは民の霊的鈍感さを語る。歴史には人間の驚異の感覚を目覚めさせるような出来事が突然起こることがある。しかしまた、人の信仰心、内的視力を汲み尽くしてしまう仕方歴史は進行する。あたかも、神が、人間から驚異の感覚を剥奪し、悟る力を与えず、鈍感さを増進させることを計っているかのように。聖書は神が人間の心を頑なにされることを幾度か述べる。44章18節は民が自ら心を頑なにすると述べる。

22章12節から14節は、民の不気味な無関心を描写する。峻烈な鞭と

破滅との脅威をもってしても嘲弄者は驚かない。28章15節は民の信念を述べる。災いが切迫している時に、なお心を頑なにしているのは不気味であり、不合理である。一国の民が、絶望の状態にありながら、なお、神の救いの言葉に耳を閉ざしていられるのはどうしてか。こうした傾向をどう説明出来るであろうか。²⁴

29章9節14節にイザヤが忠実に説教すればする程、彼の使信はユダの支配者達に愚かに響くとある。²⁵主は「それゆえわたしは、この民に行なう」と語る。「頑なさ」はユダに対する主の特別な歴史的行為なのである。

8章14節は、イザヤの使信が民の間に亀裂を創り出し、民の心を頑なにし、主自らその民にとって「わなとなった」と述べる。30章8節から13節は、主の言葉に対する民の頑なさを述べる。

イザヤの警告に民は耳を傾けなかった。この拒絶の結果、心は頑なになる。拒絶の結果として荒廃と悲嘆に落ちて行く選民の空虚さと著しい対照をなしている²⁶（6章11節）。

主の恐るべき聖さと国民の罪の深さに圧倒されたイザヤは、主の日が審判の日として臨むことを期待し（2・6—11）、アッシリヤをその審きの器と見た（5・26—29）。彼は国家が内に崩壊し（3・1—12）、荒廃へと沈み（6・11）、僅かな残りの者に帰するのを見た（10・22）。しかも、その残りの者さえ、改めて破局の火に投げ入れられると宣言した²⁷（6・13）。

Ⅲ イザヤ書以外の旧約聖書における「頑々な心」について

1 創世記における人間の頑々な態度のルーツ

人類は生来罪深い。神への反逆の結果である。創世記6章5節6節は人間の心の継続的悪が神の厳しい審き、洪水の根拠であったと述べる。人類の中で神が特別な関係を持つイスラエルの民も含める。エレミヤ書17章9節は人間の全的墮落の結果としての心を述べる。「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。」人間は全的に墮落していると言う。創世記3章は人類の墮落が人類の

頑なな態度のルーツであると述べる²⁸。

人類史冒頭の墮落に現われた罪は、人類史上に、そして、神の民イスラエルの歴史の中にも深い跡を留めている。旧約で罪を表わす主な用語は三つである。この三つはしばしば一緒に現われている（出 34・7、詩篇 32・1—2、5、51・1—3、ダニエル 9・24）。第一のハーターは חטא「的（目標）又は道はずす」である。それが聖であり、義である神との関係において「罪」と訳され、神が人に定められた道を踏み外すという意味を表わす。第二のアーウォーン יָוָה「曲げる」「歪曲する」が原意で「咎」と訳され、悪の行為を表わす。第三のペシャ עָשָׂהは「叛き」の意で、罪が神への反逆であることを最も強く表わしている。この三つが罪の本質的要素であり、三つが合わされて人間の頑なな態度が醸成される。罪の本質的要素の第一は「反逆」であり「不従順」である。アダムは、何が善であり悪であるかを語る神の大権を拒絶した。神の権威に反逆し、神に不従順な者となった。罪の本質的要素の第二は「自己本位」である。神の至高の愛と正反対のものである自己を選び愛する。罪の本質的要素の第三は、「神を排除すること」である²⁹。

2 出エジプト記における人間の頑なな態度

聖書は、心を頑なにすることが神の御業であると描写する。パロの事例は神が与える機会を無視する全ての人々の歴史の見本である。人は神が定めた行為の法則を遵守しなければ、道徳的感覚印象は益々弱まり、最後には人の心は全く無感覚になる。パロの場合には、心の頑なにする過程を表わすのに二つの言葉を用いる。カーベード כָּבַד は、多くはパロが自分の心を頑なにする時に言及し、ハーザク קִיַּןを神がパロの心を頑なにする時に用いる。

出エジプトの物語は人間の自由と神の支配の間の緊張を高めている。しかしながら、この緊張は硬化の三つの段階に照らすと、

良く理解出来る。(a) 神は災いの前にパロが心を頑なにする事について予告した(4・21、7・3)。(b) パロは自分の心を頑なにした(最初の五つの災いの間)。(c) 神がパロの心を頑なにする事は9章12節の第六の災いから始まる。ここでは(b)の人間の自由は(a)と(c)の神の支配と均衡を取っている。モーセへの、パロの心を頑なにする神の予告は、モーセが出遭う異なる困難な過程と密接に関わっていた。またパロはエジプト国民の代表であるので、パロが心を頑なにしたという事は、即、エジプト国民も心を頑なにした、ということである。³⁰

イスラエルの民はシナイの麓で金の子牛礼拝をした時に「うなじのこわい民」(出32・9)と呼ばれた(その他、33・3、5、34・9、申9・6、13)。

3 申命記における人間の頑なな態度

主は民に「悟る心と、見る目と、聞く耳を」を与えなかった(申29・4)。靈的感知は選民に神が拒んだ神の賜物である。一方靈的盲目は神の審きの行為である。そのような審きは、神の言葉を聞き、神の御業を見ることを拒む、屈折した拒絶のイスラエルの盲目性と耳が聞こえないことを確証する。³¹

イスラエル(エシュルン)は「肥え太ったとき、足でけた。」(申32・5) 主に反逆した、ということである。「肥え太った」の原形はカーサー קָסַר はイザヤ6章10節の「心を肥え鈍らせ」の「肥え」と同じ語であり、民の頑なで応答しない靈的態度を描く。エシュルンは肥え太り、主への忠誠を拒み、主を軽んじた³²

人間の心の頑なさは人類の祖先のアダムの墮落がもたらした原罪の一要素である。またエジプトのパロと異邦国民のエジプト人だけでなく、神の選びの民も頑なであった。³³

4 エレミヤ書とエゼキエル書における人間の頑なな態度

預言者エレミヤが直面したユダの民も「頑なな心」を持ち、エレミヤが伝えた神の啓示の明白な主張と使信に不信仰と反逆心をもって応えた。³⁴

エレミヤはユダの民が頑なな心で主の御告げを受け入れないと預言する。7章23節「この民には、かたくなで、逆らう心があり、彼らは、そむいて去って行った。」頑ななユダの民については、他に六度述べる。3章17節では万国の民も頑なな心の持ち主であると述べる。民は偶像礼拝を何ら差支えがないと考えた(2・35)。頑なな心の帰結は主への反抗と反逆となり、それが亡国と捕囚となっていた。³⁵

エゼキエルが神の預言の言葉を伝えたユダの捕囚民も、頑なな心を持った。主は民が「反逆の民」「反逆の家」と語った。この表現は、2章3節等に15回出て来る。2章4節「彼らはあつかましくて、かたくなである。」「かたくな」(ヒズケーイ・レーブ)の直訳は「心が堅い」「かたくな」「頑固、心が堅い」は、罪責が発覚した時でさえ、屈することをきっぱりと拒否する、頑なで頑固な意志を描写する。³⁶

エゼキエルは頑なな民への神の怒りの背後に、なお神の愛を見る。イザヤの「頑な預言」は次のバビロニア時代の二人の預言者エレミヤとエゼキエルにおいて成就した事が分かる。その結果としての神の民の亡国であり捕囚であった。³⁷

IV 新約聖書におけるイザヤ書6章の「頑な預言」の引用と展開

イザヤ6章の「頑な預言」は、イエスの奉仕と初代教会においてどのように用いられたか、それはどのような意味を持っただろうか。イザヤ書6章9節10節は、新約では六ヶ所に引用されている(マタイ13・14—15、マルコ4・12、ルカ8・10、ヨハネ12・40、使徒28・26—27、ローマ11・8)。どのように引用されているだろうか。

1 マタイ13章13節—15節におけるイザヤ書6章の「頑な預言」の引用と展開

イエスは「種まきの譬え」を語った直後に何故民に譬えで語るのかと

訊かれ、答えた。「わたしが彼らにたとえて話すのは、彼らは見てはいるが見ず、聞いてはいるが、聞かず、また、悟ることもしないからです。こうしてイザヤの告げた預言が彼らの上に実現したのです。『あなたがたは確かに聞きはするが、決してわからない。この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、目はつぶっているからである。それは、彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟って立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』」14節の導入句は、イザヤの「頑な預言」が成就した事を伝える。イザヤ6章9節10節はイザヤ自身の経験を予告した。しかし、イザヤの経験は予型論の型となっており、イエスが旧約の預言者の役割を再び演じることによって、その型は今やイエスにおいて「実現した」のである。14節の「彼らの上に実現した」とは、聴衆が霊的に鈍感であったことを示した。イエスは例え話で聴衆を弾劾した。³⁸ マタイは接続詞の「それ故」の代りに「何故なら[それは…ためである]」を用いた。つまり、一般民衆がイエスの教えの意味を把握するのが遅かったので、イエスはより分かり易くするため、譬えで語ったと言った。

2 マルコ4章12節におけるイザヤ書6章の「頑な預言」の引用と展開

イエスは頑迷なユダヤ人の不信仰に対してこのマルコ4章12節でイザヤ書6章9節10節を引用した。イエスはイザヤの言葉を引用して弟子達に、ご自分の奉仕への聴衆の反応を示した。「そこで、イエスは言われた。『あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちにはすべてがたとえて言われるのです。それは、「彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため」です。』」イエスは、御自分の使信がイザヤの預言の趣旨・調子と一致していることを示した。³⁹ イエスの教えを理解し受容出来ない人達はイザヤの使信を拒んだ人達に匹敵すると見る。イザヤの伝道は民に盲目をもたらしたが、イエスの伝道の中で繰り返される、民の反応の欠如に驚く理由はない。民の無反応の型は象徴的原型が既にあるからである。イザヤ書6章9節10節はイザヤの時代を越えての後代の時代への予告

預言であった。イエスは、イザヤ書6章9節10節を予型として受け取り、一つの成就を見た。イエスは同時代のユダヤ人の不信仰がイザヤの「頑な預言」の原型の成就であり、完了であると見たのである。⁴⁰

イエスはマルコ4章14節—20節で、神の言葉への種々の反応についての譬えを語り、弟子達に、譬えの意味を理解する内側の人達と、意味を理解出来ない外側の人達がいると言う。外側の人達に譬えで教える理由は、伝達を助けるためではなく、外側の人達を、理解出来ないままにしておくことだと説明した。イエスはイザヤ書6章9節10節を直接に同時代の人達に当てはめることによって、そのようにしたのである。⁴¹

「譬え」のヘブル語のマーシャル מִשְׁלָּה とアラム語には「謎」「パズル」「謎のような言葉」の意味もある。イエスは神の国を宣言し、神の国の到来の広範囲にわたる意味合いを明白にした。神の国がこの形で以前には開陳されなかったという意味で「奥義」であった。イエスはそれを奉仕の中で啓示した。一部の人達は、イエスの教えに心を開き、教えの意味を把握し、譬えの狙っている核心を悟った。他の人達はイエスの教えに心を閉ざした。イエスの譬えは見る目と聞く耳のある人達には光となった。しかし多くの人達には謎となった。イエスの使信を受け取れず、益を受けなかった。

もしイザヤ6章の言葉の引用を、この意味で理解すると、イエスが種蒔きの譬えを語った直後の文脈との関連は明らかである。蒔く人が種を広く蒔いたが、種の四分の一が収穫をもたらした。種の四分の三が落ちた土壌は貧弱な土壌であった。良い土地から得られた収穫は、種を蒔く労は決して空しくない。御言葉を聞いて受け入れる者達の得る利益は、背いていく者達が引き起こす損失に勝る。このように譬えはユダヤ人の心を頑なにし、民が誤解することを意図したものであり、また、隠すことを意図したものであった。⁴²

3 ルカ8章10節におけるイザヤ者6章の「頑な預言」の引用と展開

ルカ8章10節は、イザヤ書6章9節10節の最も簡潔な断片引用であ

る。「そこでイエスは言われた。『あなたがたに、神の国の奥義を知ることが赦されているが、ほかの者には、たとえで話します。彼らが見ていても見えず、聞いていても悟らないためです。』」

イエスに対する信仰と不信仰が、教会とユダヤ人を分ける決定的な唯一の要求であることを鋭く示す結果となっている。また、使徒 28 章 26 節とローマ 11 章に示される新約の救済史の図式を暗示することにもなっている。⁴³

4 ヨハネ 12 章 40 節におけるイザヤ書 6 章の「頑な預言」の引用と展開

ヨハネ 12 章 40 節は共観福音書の種蒔きの譬えとは異なる文脈でイザヤ 6 章の言葉を引用する。「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた。それは、彼らが目で見ず、心で理解せず、回心せず、そしてわたしが彼らをいやすことのないためである。」マタイ、マルコ、ルカはイエスが譬えによって民を頑なにしたが、ヨハネ 12 章 37 節から 41 節では、その御業のしるしによって、民が頑なになったと語った。⁴⁴ また 38 節は民の不信仰の理由を述べる。「それは『主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか』と言った預言者イザヤのことばが成就するためであった。」つまり、イザヤ書 6 章 9 節 10 節はイザヤ 53 章 1 節の引用句（「私たちの聞いたことを、だれが信じましたか」）と密接な関係を持っている。ヨハネにとって、イザヤ書 6 章 9 節 10 節とイザヤ 53 章 1 節は、同じイザヤの言葉であるだけでなく、同じ内容を表現する言葉として理解したのである。その内容とは、37 節の「人々がイエスの多くのしるしを見、イエスの言葉を聞きながら、信じなかった」事である。この事実を、ヨハネはイザヤ書 53 章 1 節と 6 章 9 節 10 節を引用しつつ、人間の側からではなく、主の経綸の立場から理解した。イザヤ書では、民の心を頑なにする主人公はイザヤであり、種蒔きの譬えでは、心を頑なにする主人公は民自身であった。ところが、ヨハネは「主は彼らの目を盲目にされた。また、彼らの心をかたくなにされた」と言う。⁴⁵

ヨハネはイエスの苦難・受難の物語を語る前に、民がこのようにイエスを拒んだのは単なる一回限りの現象ではなく、むしろ、イスラエルの不信仰の歴史の頂点であると述べる。その結果、預言者イザヤが彼の同時代人に対して宣べた事柄は、イエスと同時代の人々に当てはまるというだけでなく、彼らのことを予告預言したものであった。イザヤの予告預言はイエスの伝道奉仕において成就したのである。⁴⁶

イザヤは、人々に悔い改めを勧めようとする主の使信そのものが、益々人々を神から離れさせるだろうと言われた。ヨハネは、イエスの働きが失望に終わるのを説明するのに、イザヤの経験を引用したのであるが、それは驚くほど似たものであった。両者の内に働く同一の原則は、新生しない人の心は神の使信に対して頑固であるということであった。⁴⁷

ヨハネは、イザヤ6章10節を、イザヤ53章1節と並行引用することにより、民の側での「心の頑なさ」と、神の側での「受難の僕」を統一的に捉えた。「心の頑なさ」とは、「受難の僕」が提示されることによって触発される「心の頑なさ」なのである。イエスを見て信じなかった「心の頑なさ」と、イザヤの預言を聞いても信じなかった「心の頑なさ」は、ヨハネ12章41節で「イザヤがこう言ったのは、イザヤがイエスの栄光を見たからで、イエスをさして言ったのである」と説明する。「…からで」は理由とか根拠を示す。イエスの時代の人々は、イエスを見たが信じなかった。一方、イザヤは、地上のイエスを見なかったが、イエスの栄光を見て信じた。それゆえイザヤが受けた「頑な預言」は、彼の見た「イエスの栄光」抜きには考えられないというのが、ヨハネの言おうとすることである。⁴⁸

5 使徒28章25節—27節におけるイザヤ書6章の「頑な預言」の引用と展開

ローマに到着したパウロはユダヤ教指導者達に福音を語り、討論したが、決裂した。その時パウロはユダヤ教徒達に次のように語った。それが使徒28章25節から27節である。「聖霊が預言者イザヤを通してあな

たがたの父祖たちに語られたことは、まさにそのとおりでした。『この民のところに行って告げよ。あなたがたは確かに聞きはするが、決して悟らない。確かに見てはいるが、決してわからない。この民の心は鈍くなり、その耳は遠く、その目はつぶっているからである。それは、彼らがその目で見、その耳で聞き、その心で悟って、立ち返り、わたしにいやされることのないためである。』

使徒 28 章 26 節 27 節は使徒の働きの最後の章の重大な締め括りの言葉になっている。使徒の働きは、キリスト教が異邦人の間に広まって行ったことを記しているが、同時にこれと並んで、大多数のユダヤ人が同じ使信を拒否したことも記されている。この記事は、使徒の働きに記録されたユダヤ人の拒否の、最後の事例である。即ち、イザヤ書 6 章 9 節 10 節の引用が適切な結末を与えている。この句節で、イザヤは預言者としての職務に召されるに当たり、民の好意ある応答を期待してはならぬと、戒められている。彼の公けの活動によって、ユダの民は心が頑なになった。初代キリスト教会がこの句節を、ユダヤ人全般の福音拒否を予示した旧約証言として用いたことは、最高の権威に基づいている。即ち、この句節は共観福音書も第四福音書も共に証言している通り、主御自身が、この意味で引用したのである。この句節が使徒の働きの終わりにあることは、それがヨハネ 12 章 40 節に、即ち、第四福音書の第一部の終わりに現われていることと、著しく類似している。イエスの伝道活動で始まった心を頑なにすることは、使徒の働きの終わりで頂点に達したのである。⁴⁹ 第四福音書の第一部は、ヨハネ 1 章 11 節の「この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった」という言葉を表題として持っていると言えよう。パウロは、使徒の働き 28 章 28 節で、これからは異邦人が救いの使信を受ける優先権を持ち、彼らは、大多数のユダヤ人と異なり、この使信を受け入れるであろうと、宣言した。使徒の働きの説話は莊嚴な頂点に達した。一方には福音の拒否があり、他方には止まるところを知らない拡大と希望がある。この引用句を起点として、新しい教会史の展開がある。⁵⁰

6 ローマ 11 章 8 節におけるイザヤ書 6 章の「頑な預言」の引用と展開

パウロはローマ 11 章 8 節でイザヤ書 6 章の頑な預言を引用した。「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられた。今日に至るまで。」これはイザヤ 29 章 10 節の「主があなたがたの上に深い眠りの霊を注ぎ、あなたがたの目を閉じる」と申命記 29 章 4 節と、イザヤ者 6 章 9 節 10 節を合わせた質問である。ローマ 11 章 8 節の文脈は、ローマ 9 章から 11 章までのイスラエルの不信仰という痛ましい問題の論述の中である。ユダヤ人は、眠りこけている人のように、圧倒的な無関心の状態になる。ユダヤ人は、キリストを見たが、キリストを信じない。御言葉を聞いたが受け入れない。それは恰も見たことも、聞いたことのないような状態である。11 節と 12 節は、ユダヤ人が躓いたのは、異邦人の所に福音をもたらすためであったと述べて、使徒の働き 28 章 26 節 27 節と同じ響き、こだまがある。ここにも新しい教会史の展開が始まることを告げる。⁵¹

結語

神はイザヤを遣わしてイスラエルのために復興を与えようとする。イザヤが神の器として遣わされ、預言した結果、民は頑なになり、イザヤは悲しみの器となる。それを通して神の審きがなされ、そして復興の望みがそれを通して現われる。

人の心の頑なさは祖先のアダムの、神への反逆、叛きに源があり、原罪の現われの一つとして代々受け継がれた。出エジプトした神の民に心の頑なさがあった。また異邦諸国の王と民にも心の頑なさがあった。そしてエレミヤ、エゼキエルの預言活動においてもユダの民とユダの捕囚民は頑なな心を露呈した。

イエスの伝道活動と初代教会の伝道活動においてイザヤの頑な預言は予型論的に成就した。イザヤ書 6 章の「頑な預言」には予型としての意味がある。しかしイザヤとイエスの間に、更なる類比の意味がある。両

者は反逆の民に神によって遣わされた。そして二人の説教は理解と悔い改めではなくて、大いなる盲目性を産み出した。再び私達は神の働きが繰り返されるのを見る。

イエスの使信へのユダヤ人の不信仰は、イスラエルの悪者達の不信仰、異邦諸国の高慢さの中に予表されている。イエス・キリストは旧約の神の民の全ての局面において、御自身と御自分の御業の前触れを見た。その結果、ユダヤ人の大多数の反対と拒絶に出会った。一方、真のイスラエルは、新しいキリスト教共同体の中に見られる。こうしてイエス・キリストが来た時に、イスラエル史は、その決定的な点に達した。旧約聖書の全体がイエスにあって一つに集められる。イエスは御自身において、イスラエルの身分と運命を具現化する。そして、イエスに属する者達の共同体においてその身分と運命が成就する。イザヤの「頑な預言」はイエス・キリストによってもたらされる新しい共同体出現とそれを拒絶する大多数のユダヤ人共同体との決裂をもたらす重大な契機となっている。⁵²

註

- 1 J・ブライト『イスラエル史 下』新屋徳治訳（東京・聖文舎 1968年）、39頁。
- 2 S.H.Widyapranawa, The Lord is Saviour : Faith in National Crisis A Commentary on the Book of Isaiah1-39 (Grand Rapids, Michigan:Wm.B. Eerdmans Publishing Company, 1990), p.30.
- 3 C. Von Orelli, The Prophecies of Isaiah (trans. By J.S. Banks Edinburgh:T.& T.Clark, 1889), p.45.
- 4 マグダレナ・エステル・トーレス＝アルピ『預言者たちの靈性 私たちとのかかわりを求めて』、南大路くに訳（東京：サンパウロ、2002年）、149頁。
- 5 手塚儀一郎『イザヤ書第一巻 第1章—第39章』手塚儀一郎、中沢

- 治樹編 旧約聖書註解シリーズ 17 (東京：新教出版社、1964年)、54頁。
- 6 S. H. Widyapranawa op. cit., The Lord is Saviour: Faith in National Crisis A Commentary on the Book of Isaiah 1-39, p.32.
 - 7 S. H. Widyapranawa op. cit., The Lord is Saviour: Faith in National Crisis A Commentary on the Book of Isaiah 1-39, p.33.
 - 8 樋口信平『イザヤ書Ⅲ 注解[1]』(埼玉県和光市・一粒社、2008年)、179—180頁。
 - 9 浅野順一「予言者と国防」『旧約神学研究Ⅰ—浅野順一著作集二』(東京・創文社、昭和57年)、166頁。
 - 10 Hans Wildberger, Isaiah 1-12 A Commentary (trans. By Thomas H. Trapp, Minneapolis: Fortress Press, 1991), p.250.
 - 11 樋口信平、前掲書『イザヤ書Ⅲ 注解[1]』、181頁。
 - 12 J.W. Watts, A Survey of Syntax in the Hebrew Old Testament (Grand Rapids, Michigan: William B. Eerdmans Publishing Company, 1963), p.87.
 - 13 F. F. Bruce, The Hard Sayings of Jesus (Downers Grove, Illinois: Inter Varsity Press, 1983), p.100.
 - 14 関田寛雄「イザヤ書第六章 1—13節」『イザヤ書 説教者のための聖書講解釈義から説教へ』(東京・日本基督教団出版局、1986年)、77頁。
 - 15 TH.C. フリーゼン『旧約聖書神学概説』田中理夫、木田献一訳(東京・日本基督教団出版局、1969年)、281頁。
 - 16 Otto Kaiser, Isaiah 1-12 A Commentary (Philadelphia: The Westminster Press, 1972), p.83.
 - 17 Franz Delitzsch, Biblical Commentary on the Prophecies of Isaiah Vol. I (Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1950), p.200.
 - 18 John D.W. Watts, Isaiah 1-33 Word Biblical Commentary Vol. 24

- (Waco, Texas: Word Books, 1985), p.75.
- 19 Hans Wildberger, op. cit. Isaiah 1-39 A Commentary, pp.272-273.
 - 20 矢内原忠雄『続 余の尊敬する人物』岩波新書（青版）14（東京・岩波書店、昭和24年）、5—6頁。
 - 21 Willem A. VanGemen ed. New International Dictionary of Old Testament Theology & Exegesis Vol. I (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1997), p.91.
 - 22 Willem A. VanGemen, Interpreting The Prophetic Word (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1990), p.256.
 - 23 S. H. Widyapranawa, op. cit. The Lord is Saviour: Faith in National Crisis A Commentary on the Book of Isaiah 1-39, p.37.
 - 24 A. J. ヘッセル『イスラエル預言者 上』森泉弘次訳（東京・教文館、1992年）、175—177頁。
 - 25 John N. Oswalt, Isaiah 1-39, The New International Commentary on the Old Testament (Grand Rapids, Michigan: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1986), p.531.
 - 26 マグダレナ・エステル・トーレス＝アルピ、前掲書『預言者たちの靈性 私たちとのかかわりを求めて』149—150頁。
 - 27 J. ブライト 前掲書『イスラエル史 下』、40頁。
 - 28 S. H. Widyapranawa, op. cit., pp.33-35.
 - 29 安黒 務「つみ」鍋谷堯爾／藤本浩／小林高德／飛鷹美奈子編集『聖書神学事典』（東京・いのちのことば社、2010年）、521—523頁。
 - 30 Willem A. VanGemen ed. New International Dictionary of Old Testament Theology & Exegesis Vol. II (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1997), p.720.
 - 31 Willem A. VanGemen ed. New International Dictionary of Old Testament Theology & Exegesis Vol. IV (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1997), p.177.
 - 32 Willem A. VanGemen ed. New International Dictionary of Old

- Testament Theology & Exegesis Vol.III (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1997), p.732.
- 33 J.A. トンプソン『申命記』ティンデル聖書注解、小山田格訳（東京・いのちのことば社、2010年）、353頁。
 - 34 George Arthur Buttrick ed. The Interpreter' s Bible Vol. V (Abingdon Press, 1956), p.212.
 - 35 矢内原忠雄、前掲書『続 余の尊敬する人物』8—11頁。
 - 36 ジョン・B・テラー『エゼキエル書』ティンデル聖書注解 関野裕二訳（東京・いのちのことば社、2005年）、66—67頁。
 - 37 江口武憲『望楼に立つ—エゼキエル書による説教』（東京・新教出版社、1969年）、26—29頁。
 - 38 R・T・フランス『マタイの福音書』ティンデル聖書注解 山口 昇訳（東京・いのちのことば社、2011年）、299頁。
 - 39 樋口信平、前掲書『イザヤ書Ⅲ 注解 [1]』181頁。
 - 40 R.T. France, Jesus and the Old Testament His Application of Old Testament Passages to Himself and His Mission (Grand Rapids, Michigan: Baker Book House, 1970), p.68.
 - 41 Steve Moyise ed. The Old Testament in the New Testament Essays in Honour of J. L. North, Journal for the Study of the New Testament Supplement Series 189 (Sheffield Academic Press, 2000), p.23.
 - 42 F. F. Bruce, op. cit. The Hard Sayings of Jesus, pp.102-103.
 - 43 鍋谷堯爾『人間イザヤとその預言—21世紀へのメッセージ』（東京・いのちのことば社、2000年）、68頁。
 - 44 Willem A. VanGemeren ed. New International Dictionary of Old Testament Theology & Exegesis Vol. IV (Grand Rapids, Michigan: Zondervan Publishing House, 1997), p.172.
 - 45 鍋谷堯爾、前掲書、『人間イザヤとその預言—21世紀へのメッセージ』69頁。

- 46 R.V.G. タスカー『ヨハネの福音書』ティンデル聖書注解 小林高德訳 (いのちのことば社、2006年)、196頁。
- 47 M.C. テニー『ヨハネによる福音書』新約聖書註解 (仙台市・聖書図書刊行会、1958年)、192—193頁。
- 48 鍋谷堯爾、前掲書、『人間イザヤとその預言—21世紀へのメッセージ』72頁。
- 49 Steve Moyise, *The Old Testament in the New An Introduction* (London and New York; CONTINUUM, 2001), pp.46-49.
- 50 F.F. ブルース『使徒行伝』(仙台市・聖書図書刊行会、1958年)、576—577頁。
- 51 F.F. ブルース『ローマ人への手紙』ティンデル聖書注解 (東京・いのちのことば社、2008年)、213頁。
- 52 R. T. France, *op. cit.*, *Jesus and the Old Testament His Application of Old Testament Passages to Himself and His Mission*, pp. 75-78.

Der 1. Sonntag

1. Frage: Was ist dein einiger Trost im Leben und im Sterben?

Antwort: Daß ich mit Leib und Seele, beide im Leben und im Sterben,¹
nicht mein,² sondern meines getreuen Heilands Jesu Christi eigen
bin,³

der mit seinem teuren Blut⁴ für alle meine Sünden
vollkömmllich bezahlt⁵ und mich aus aller Gewalt des Teufels
erlöst hat⁶

und also bewahrt,⁷ daß ohne den Willen meines Vaters im
Himmel kein Haar von meinem Haupt kann fallen,⁸ ja auch mir
alles zu meiner Seligkeit dienen muß.⁹

Darum er mich auch durch seinen Heiligen Geist des ewigen
Lebens versichert¹⁰ und ihm forthin zu leben von Herzen willig
und bereit macht.¹¹

1) Röm. 14:8, 2) 1 Kor. 6:19, 3) 1 Kor. 3:23, 4) 1 Petr. 1:18-19, 5) 1 Joh. 1:7; 2:2,
6) 1 Joh. 3:8, 7) Joh. 6:39, 8) Matth. 10:29-31; Luk. 21:18, 9) Röm. 8:28, 10) 2.
Kor. 1:21-22, Eph. 1:13-14, 11) Röm. 8:15-16, 8:14

2. Frage: Wieviel Stücke sind dir nötig zu wissen, daß du in diesem
Trost selig leben und sterben mögest?

Antwort: Drei Stücke: erstlich, wie groß meine Sünde und Elend sei;¹
zum andern, wie ich von allen meinen Sünden und Elend²
erlöst werde;³

und zum dritten, wie ich Gott für solche Erlösung soll dank-
bar sein.⁴

1) Luk. 24:46-47; 1 Kor. 6:11; Tit. 3:3-7, 2) Joh. 9:41; 15:22, 3) Joh. 17:3, 4) Eph.
5:8-11; 1 Petr. 2:9-12; Röm. 6:11-14